

〈研究ノート〉

イタリア時代のスラッファ — 生い立ちと研究者への道 —

Some Notes on Piero Sraffa's Biography, 1898-1927

松 本 有 一

Piero Sraffa (1898-1983) was born in Turin, Italy. He graduated from the University of Turin in 1920 and was enrolled at London School of Economics as a research student the following year. His main concern was Italian banking and financial problems of that time. Sraffa also worked at the Labour Research Department (London) to investigate labour problems in the UK. He returned to Italy in April 1922 and was appointed to a director of the provincial labour department in Milan, but resigned from this position in December. His academic career started as a lecturer in political economy at the University of Perugia in November 1923. Sraffa published his famous article which criticized the Marshallian theory of costs of firms in December 1925 and he was appointed to the chair of Political Economy by the University of Cagliari in March 1926. The purpose of this paper is to investigate when and why Sraffa decided to attempt a career as an academic economist and started to study theoretical problems.

Yuichi Matsumoto

JEL : B31

キーワード：スラッファ、トリノ大学、LSE 研究生、ケインズ、ベルーシア大学、カリ
アリ大学

Keywords : Piero Sraffa, University of Turin, research student(LSE), Keynes,
University of Perugia, University of Cagliari

はじめに

イタリア人経済学者ピエロ・スラッファ (Piero Sraffa, 1898-1983) の主要な研究業績として挙げられるのは、一般的には (1) マーシャル理論を批判した

1925 年、26 年の論文、(2) デイヴィッド・リカードの著作・書簡集の編集（序文でのリカード解釈を含む）、そして (3) 1960 年に刊行された『商品による商品の生産』である。

スラッフアが研究者としてアカデミズムへの道を明確に意識し始めたのは、1923 年以降と考えられる。スラッフアが大学を卒業したのは 1920 年 11 月であるが、かれは学生時代に何をしていたのか、卒業後、大学に職を得るまで何をしていたのか。そのようなことに関して、イタリアの研究者を中心にかなり明らかにされているが、日本語の文献では藤井盛夫氏だけで（藤井 1987、2000）、一次資料に基づく包括的な紹介は十分ではない。また、過去においてはかなり不正確な情報（口承伝説的で、資料的な裏付けがない）でスラッフアの経歴が紹介されたりしていた¹⁾。

本稿の目的の一つは、生い立ちから 1927 年に英国ケインブリジ大学の経済学講師として赴任するまでの、イタリアでのスラッフアを、ポチエ (Jean-Pierre Potier)、ナルディ (Nerio Naldi)、ロンカッリア (A. Roncaglia) などによる一次資料に裏付けられた研究に依拠しながら記述しようというものである。日本語で書かれた同様の研究は前述の藤井を除いて今のところなく、本稿に一定の意義はあると思われる。本稿のもう一つの目的は、1920 年から 22 年にスラッフアが書いた、イタリアの通貨、金融ないし銀行問題に関する 3 つの論文を取り上げて考察することである。最初に挙げたスラッフアの 3 つの主要な研究業績に関しては、これまで多くの議論がされているが、通貨・金融問題に関するスラッフアの初期の論文は海外でも取り上げられることは少ないようである。さらには 1921 年から 22 年の LSE (London School of Economics) 留学時を含めて、1927 年半ばまでスラッフアは経済学にどのように取り組んでいたのかを見ることをしたい。本稿の記述内容で特定の文献にもつばら依拠している場合、その旨を明記するか、各段落の末尾に出所を記載している²⁾。

- 1) 松本 (1989) のでの記述も部分的にはそうであったが、ある時期までは資料利用の面で止むを得なかった。英文の一次資料に基づく松本自身の研究として、松本 (1992a, 1992b) がある。
- 2) 本稿で利用するイタリア人研究者ロンカッリアとナルディ、フランス人研究者ポチエ等の研究はすべて英文あるいは英訳で刊行されたものだけである。イタリア語でしか利用できない文献は十分には参照できていない。

スラッファの生い立ち

スラッファの父親のアンジェロ・スラッファ (Angelo Sraffa) は 1865 年 12 月 19 日、ピサで生まれた。ユダヤ家系の出である。母親は Arduina Fanny Amalia Tivoli で 1873 年 5 月 5 日、トリノで生まれ、イルマ (Irma) の名で知られている。従来、イルマ・ティヴォリ (Irma Tivoli) と紹介されている。姉妹はみな著名人と結婚していて、Maria Tivoli と結婚したダメリオ (Mariano D'Amerio) はイタリア王国の破棄院 (Corte di Cassazione、日本の最高裁判所にあたる) の初代長官で上院議員を務めた。アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci) がファシスト政権のもとで拘束され、投獄されたとき、スラッファはグラムシ救出のため努力をしたが、そのとき、母方のおじであるダメリオの力を借りようとした (後述するように、グラムシはスラッファの実家を何度か訪問しており、母親イルマとも面識があったと思われる)。アンジェロとイルマは 1897 年 7 月 4 日に結婚し、1898 年 8 月 5 日にピエロ・スラッファが生まれた。ナルディはスラッファの幼少のころの様子や学業成績を紹介しているが、ここでは割愛する。父親の転勤に伴いいくつか学校をかわっている³⁾。(Naldi 2010)

1912 年 6 月末から 8 月はじめの期間、スラッファはドイツ語の上達のためドイツで休暇を過ごした。その前年には、スラッファの中学校の教師で、ボッコニ大学でもドイツ語を教えた Leone Nicolini から 1 か月スイスで個人指導を受けていたようである。1913 年 10 月にアンジェロ・スラッファはパルマ大学からトリノ大学に移り、一家もミラノからトリノに移った。ピエロは高等学校のリチェオ・マッシモ・ダゼッリオ (Liceo Massimo D'Azeglio) に入学した。多くの学科で成績は改善したが、数学の成績は良くなかったようである。この高等学校時代、イタリア語の教師がウンベルト・コズモ (Umberto Cosmo) であった。後述のように、のちにスラッファとグラムシを引き合わせたのはコズモであった。(Naldi 2010)

3) ナルディはスラッファを not an easy child to deal with であったと述べている。松本は単に見ただけであるが、英国ケンブリッジのトリニティ・コレッジにある Sraffa Papers にはプライベートな記録や写真なども保管されている。スラッファの両親、特に父親の経歴については藤井 (1987) が詳しい。

大学生時代

スラッフアは 1916 年秋にトリノ大学に入学したが、1917 年 3 月に軍務についた。士官としての訓練を受けたのち、1917 年 8 月から第一工兵連隊 (1st Reggimento Genio Zappatori, 英訳で First Regiment Corps of Engineers) で職務についた。戦後は、ローマに本部があった、敵の違反行為に関する王立調査委員会 (Reale Commissione d'Inchiesta sulle Violazioni del Diritto delle Genti Commesse dal Nemico, 英訳で Royal Commission of Inquest on the Violation of the Law of Nations Committed by the Enemy) の担当者に任命された。6 巻になる委員会レポートは、1919 年の 1 月中ごろから 2 月初旬に、スラッフアが委員会の上級メンバーとともにヴェネチアやトリエステ地方に出張し、ドイツやオーストリアによる残虐行為に関する証言を集めていたことを示している。それとは別にスラッフアが学業にもどる機会はさらに小さくなった。なぜなら、スイス国境に近い小さな村の Luino でひどい虫垂炎にかかり、そこには医療機関がなかったため、そのため 1919 年 9 月から 1920 年 1 月までコモ (Como) の病院に入院せざるをえなかったからである。1920 年 2 月 25 日から休暇をとっていたが、スラッフアは 3 月 12 日最終的に軍務を離れた⁴⁾。(Naldi 1998b)

スラッフアは 1920 年 11 月 29 日、トリノ大学法学部を卒業した。卒業論文は「戦中・戦後のイタリアの貨幣膨張」で、ルイージ・エイナウディ (Luigi Einaudi) が指導した。エイナウディは第 2 次大戦後、イタリア共和国の大統領を務めた。しかし、実際のところエイナウディはスラッフアの卒業論文が出来上がってからコメントしただけのようである。(Naldi 1998b)

エイナウディについて Potier (1991) から補足しておく。エイナウディは 1902 年にトリノ大学法学部の教授になった。アンジェロ・スラッフアもトリノ大学に在職していた。アンジェロは 1917 年にミラノに新設されたボッコニ大学の学長に就任するが、1920 年に経済研究所を設立し、エイナウディは

4) Potier(1991, p.6) では 1918 年末に軍務を離れ、トリノに戻ったとある。Roncaglia (2009, p.1) は、スラッフアは軍服を着て大学の試験を受けたが、試験官には好印象であったと述べている。

1923 年まで所長を務めた。スラッファはエイナウディの講義や、限界主義者で統計学教授で、またマーシャル学徒であった Pasqual Jannaccane の講義を受けた。藤井 (1987, 139 頁) は、スラッファがそこで学んだのは「当時のイタリアに定着しつつあった、あるいは定着していた限界主義の経済学であった」と述べている。

卒業論文の内容はあとで取り上げるが、そのオリジナルは 64 ページからなるタイプ打ちで現在はトリノのルイーダ・エイナウディ財団にあり、エイナウディによる書き込みがあると Potier (1991, p.79, note32) は報告している。審査員はエイナウディのほか、Gaetano Moscs と Renzo Fubini であった。1920 年 11 月 29 日に口頭試問が行われた。Potier (1991, p.8)

藤井 (2000、72 頁) はエイナウディ財団に所蔵されている「厚紙の表紙が付けられた卒業論文は、本文 63 枚、扉と目次の合計 65 枚のタイプ用紙からなっている」と報告している。また藤井は、口頭試問は 11 月 29 日 (月) の午後 4 時からだったと、エイナウディの書き込みから判断している。

スラッファの卒業論文は少数であるが印刷された。印刷された論文は、表紙、扉、目次があり、本文は 5 から 47 までのページ番号が付されている。表紙には「Novembre 1920」と年月が印刷されている。松本は、トリニティ・コレッジ図書館に保管されているスラッファ自身が所持していた 1 部を閲覧し、著作権管理者であったガレッニャーニ (P. Garegnani) 教授の許可を得て、フォト・コピーを得ることができた (1991 年 8 月のこと)。

卒業論文のタイトルは「戦中・戦後のイタリアの貨幣膨張」であるが、Roncaglia (2009, p.2) は卒業論文の主題を示唆したのはエイナウディではなく、ジェノヴァ大学の経済学教授でアンジェロ・スラッファの友人であったカビアーティ (Attilio Cabiati) であったという。藤井 (1987、137 頁) によると、アンジェロ・スラッファがボッコーニ大学学長就任時カビアーティは同大学で商業政策と関税法を教えていた。

スラッファは卒業までにトリノで法律家としての訓練を終えていた。ある時期、ミラノ近くの小さな町にある銀行の地方支店で実務経験をした⁵⁾。(Naldi 1998)

5) Roncaglia (2009, p.3) によると、この銀行の名称は Banca di Legnano e Busto Arsizio

グラムシとの出会い

スラッファとアントニオ・グラムシとの交友関係はよく知られている。二人の関係についての研究はグラムシ研究の過程で先行していたように思われる。Potier (1991) では一つの章がこれに充てられているが、ここでは Naldi (2000) を参照して簡単に見るに留める⁶⁾。

スラッファがグラムシと最初に会ったのは、おそらく 1919 年で、スラッファが軍務の休暇中のころであった。それはウンベルト・コズモの紹介による。コズモはスラッファが通っていた高校 (Liceo Massimo D'Azeglio) の教師で、トリノ大学の講師もしていた。グラムシはトリノ大学でコズモの講義を受けていた。二人が最初に会った時期を確定する明確な資料はないようで、ナルディは 1919 年 2 月はじめから 3 月のはじめの間か、もしくは 1919 年 9 月半ばより前のあるとき、と推測している。別の証言からは 5 月 1 日と 9 月のはじめの間とも考えられる。さらに、1920 年のはじめころ、二人は頻繁に会っていた。スラッファの学友の Paolo Vita-Finzi は、1920 年夏にグラムシと共にスラッファの実家を訪問したと報告している⁷⁾。

以後、スラッファとグラムシの交友・友情はつづく。ナルディが取り上げている二人の関係に関する問題は、ファシスト政権のもとでのイタリア経済に関すること、それへのケインズ (John Maynard Keynes) の係り、スラッファが 1925 年、26 年のマーシャル批判論文の切っ掛けはグラムシの示唆によるとか、スラッファの古典派経済学、とりわけリカードへの関心はやはりグラムシからの影響であるとか、いずれも大きな課題である。ここでは、そのような、より詳しく解明すべき課題があることを指摘するにとどめる。

である。レニャーノ (Legnano) とブスト・アルシーツィオ (Busto Arsizio) はミラノ近郊にある隣接する町である。

6) Naldi (2000) の参考文献にグラムシとスラッファの関係を主題とするイタリア語の文献がいくつかあがっている。
7) Naldi (2005, p.384) に、1924 年の春、グラムシとスラッファ二人はローマでしばしば会っていたと記されている。

ロンドン留学

スラッファは1921年4月から（4月12日ロンドン着；Naldi 2000, p.82）1922年6月3日までロンドンに滞在した。LSEの研究生として登録し、また英国労働党のLabour Research Departmentで調査員として働いた。LSEでは一般の学生用のいくつかの講義、特にフォクスウェル（H. S. Foxwell）の講義を受けた。その間、スラッファはグラムシの新聞*L'Ordine Nuovo*に英国とアメリカの労働階級に関する3本の記事を書いた。（Naldi 1998）

Potier（1991,p.8）は1921年6月から8月の3か月、スラッファはLSEにgeneral research studentとして在籍し、1921-22学年度にLSEに戻ったという。のちに示す資料から1921年の夏にスラッファは、いったんイタリアに帰国したようである。

松本が調査したSraffa PapersのB4/1:15,16は1922年1月6日付、LSEのSecretary（J. Mair）によるスラッファに関する証明書であって、「THIS IS TO CERTIFY that PIERO SRAFFA enrolled as a student of the London School of Economics in October, 1921. He followed with regularity a course of study in subjects connected with Economics, Political Science, Commerce and Industry.」と記されている。

Labour Research Departmentは現存していて、現在のウェブ・サイトによると、それはまず、1912年にフェビアン協会がスポンサーとなったCommittee of Inquiry into the Control of Industryとしてスタートし、1913年にFebian Research Departmentとして設立され、1918年に名称がLabour Research Departmentとなったとある。労働運動、社会主義運動、協同組合運動と協力、協同し、情報提供、出版物の発行など、100年間当初の立場を維持しているとのことである。松本が調査したSraffa PapersのB4/1:17,18は1922年1月6日付のロンドンのLabour Research DepartmentのInternational SectionのSecretary（R. Palme Dutt）によるスラッファに関する証明書で、「During the past year Mr. Piero Sraffa has been assisting in the work of the Labour Research Department as well as conducting investigations of his own into labour problems in this country. His technical knowledge of

labour organization and conditions abroad has been of very great value to the Department and his own investigations have been marked by a real insight and grasp in comprehending the complex situation in this country.」と記載されている。

1921 年 7 月の終わりのころ、スラッファはガエタノ・サルヴェミニ (Gaetano Salvemini) を通じて、ケインズの知人であるメアリ・ベレンソン (Mary Berenson) が書いてくれたケインズ宛ての紹介状 (1921 年 7 月 15 日付) を手にした⁸⁾。1921 年 8 月 5 日付でスラッファはケインズに面会を求める手紙にこの紹介状を同封して送った。Naldi (2005, p.381) は、ケインズの面会日誌 (appointment diaries) から 1921 年 12 月 7 日と 1922 年 3 月 20 日の 2 回、スラッファはケインズとロンドンで会ったと報告している。これまで、スラッファがケインズと最初に会ったのは 1921 年の夏といわれていたが、資料による裏付けがあったわけではない。1921 年 12 月 7 日が最初であったのかもしれない。スラッファは 8 月 5 日付の手紙で、8 月 20 日より前か 9 月 3 日より後であれば、いつでも参りますと書いていた。実際、Naldi (2000, p.82) によると、スラッファは 1921 年 8 月の終わりにイタリアの実家に一時帰国しているので、8 月にケインズと会うことはできなかったのであろう。

スラッファがケインズと最初に会ったのが 1921 年 12 月 7 日であるとするならば、このすこし前から、ケインズは『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル Manchester Guardian Commercial』特集号「ヨーロッパにおける再興 Reconstruction in Europe」のための編集、執筆者の選定作業を続けていて、スラッファが卒業論文で扱ったイタリアの通貨や金融に関する話を聞き、そしてスラッファの能力を見抜いたとすれば、イタリアの金融システムや銀行業の実態などについて論文記事を書かせることを、ケインズは初対面で判

8) 1920 年 4 月から 5 月にケインズはダンカン・グラントとヴァネッサ・ベルとともにローマ旅行に出かけた際、フィレンツェ近郊のベレンソン夫妻の別荘に滞在した。メアリの夫のバーナード・ベレンソンは美術史家で、メアリはバートランド・ラッセルの最初の妻の姉妹であった。Dostaler (2007, pp.277-278)、Harrod (1951, p.118、邦訳 (上) 138-139 頁) 参照。

断したと考えることは十分可能である⁹⁾。

スラッファはロンドンを離れる前に数週間旅行をした。4月15日にマンチェスター、4月21日にエディンバラ、4月23日にヨークに滞在し、たぶんアイルランドにも行ったようである (Naldi 2005, p.380)。

イタリアでの職歴

イタリアに帰国後かれはミラノの労働局のディレクター職に就いた。1922年4月22日付でミラノ県はスラッファを地方労働局のディレクターに任命したが、実際に任務に就いたのは1922年6月であった¹⁰⁾。しかし、12月の初めにはこの職を辞任した。(Naldi 1998b)

1922年6月、『エコノミック・ジャーナル』誌に論文「イタリアにおける銀行危機」(Sraffa 1922a)が掲載された。労働局を辞任して1週間も経たない、1922年12月7日に『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』の特集号「ヨーロッパにおける再興」第11号に、イタリアの銀行システムに関するスラッファの2つ目の論文「今日のイタリアの銀行業」(Sraffa 1922b)が掲載された。この論文に対して首相になったばかりのムッソリーニ (Benito Mussolini) は、イタリアの金融に関して悲観的な印象を与えるとして、息子にそれを払拭するための論文を書かせるよう、スラッファの父親アンジェロに対して電報を打った(12月20日と21日)。アンジェロは息子が論文で扱っている銀行の状況はすべて公表されている数字や単に事実を述べただけだという

9) ケインズが編集主幹を務め、1922年4月10日の第1号から1923年1月4日の第12号まで刊行された『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』の特集号「ヨーロッパにおける再興」は、『マンチェスター・ガーディアン』編集長 C.P. スコットからケインズへの提案(1921年10月のこと)によるものであった。経緯などは『ケインズ全集』第17巻 (Keynes 1977) の第5部「ヨーロッパにおける再興 (1921-1923年)」に、ケインズが執筆した論文記事などと共に詳細に記載されている。なお、特集記事部分は第1号から第12号まで通しページが付され、ページ番号781までである。

10) Sraffa Papers の B4/1 に関連資料がある。カタログ書誌事項に「Papers relating to the appointment of PS as Director of the provincial labour department (13 docs) 1922」と記されている資料である。辞任の件は1923年1月13日付のスラッファからケインズ宛の手紙で言及されている。Naldi (2005, p.382) は、ミラノ県の社会主義行政府が崩壊した直後の1922年12月2日に辞任したと記している。

ことで、要求を拒否した¹¹⁾。(Naldi 1998b)

『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』特集号「ヨーロッパにおける再興」はイタリア語でも発行されていて¹²⁾、ムッソリーニはおそらくイタリア語版で読んだのであろう。アンジェロが要求拒否の回答をしたのち、ムッソリーニ側から報復(身の危険を感じるような)といったことはなかったようであった。1922年12月25日、スラッファはケインズに宛ててムッソリーニからの電報の内容を英訳して知らせた。イタリアから外国へ送る手紙は検閲のため開封されるので、スイスから郵送した。返事はスイスのルガノ Lugano の局留めで送って欲しいと知らせている。1923年1月9日付でケインズは事態が収まるまでイギリスに来るよう勧めた。スラッファはイギリスへの入国を拒否された(松本 1998、217頁; Naldi 1998b, pp.499-500、参照)。

ムッソリーニの怒りを買った要因は何だったのであろうか。単にイタリアの銀行に対する不信をあおるといったことだったのだろうか。スラッファはイタリア割引銀行の破綻問題を取り上げているが、その原因になったアンサルド社にむしろその要因があったのかもしれない。というのは、アンサルド社はムッソリーニの新聞「Il Popolo d'Italia (イタリア人民)」のパトロンであったからである¹³⁾。しかし、『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』紙の論文記事ではアンサルド社への言及はない。アンサルド社とイタリア割引銀行との関係という点では、『エコノミック・ジャーナル』掲載論文が大きく取り上げていた。『エコノミック・ジャーナル』は学術誌であり、英文だけであるので、ムッソリーニは周辺を含めて、その存在を知らなかったのだろう(アンサルド社に関しては後述)。

これら 2 つの論文と卒業論文に関しては後に詳しく取り上げる。

11) ムッソリーニからの電報以降の経過に関する資料は Naldi (1998b, pp.507-509) の Appendix A に取められている。

12) フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語でも発行されていて、スラッファの論文のイタリア語版でのタイトルは「L'attuale situazione delle banche italiane」である。イタリア語タイトルは Roncaglia (2009, p.174) 参照。スラッファは 1923 年 1 月 22 日付のケインズ宛手紙の中で、「ヨーロッパにおける再興」第 11 号のイタリア語版を受け取った旨知らせている。

13) この点に関しては藤岡 (2009) の注 54 を参照。

1923年4月までにはスラッファはマーシャルの『経済学原理』を精読し始めていた。この事実はスラッファが経済学教授としてのアカデミックキャリアを目指すことを決意していたことを示唆している、とナルディは考えている。スラッファは1923年11月にペルージア大学に職を得て、1926年2月まで経済学と財政学を教えた¹⁴⁾。その後、1926年3月にカリアリ大学に移って経済学教授に任命された。ペルージア時代にカピアーティからジェノヴァへの移籍の誘いがあったが断っている。(Naldi 1998b)

スラッファがペルージア大学に職を得た経緯は不明だが、同じときジェノヴァ大学に職を得るべく動いていた。それはスラッファがフォクスウェルに対して、ジェノヴァのための推薦状を依頼していたことである(1923年9月29日付速達便)。この手紙は、お願いしている推薦状を早く送って欲しい旨をフォクスウェルに知らせたもので、この中でジェノヴァ大学の職について「Assistant in Economics, at the School of Commerce in Genoa」と記載されている。この手紙は関西学院大学図書館所蔵の「フォックスウェル文書」にある。

スラッファは1923年12月に出版されたケインズの『貨幣改革論 A Tract on Monetary Reform』をイタリア語に訳し、それは1925年1月に出版された。ペルージア大学在職中の仕事である。

ケインズの尽力があり、スラッファは英国への再入国が可能になり、1924年夏、ロンドンに滞在した¹⁵⁾。このときスラッファはモーリス・ドップ (Maurice Dobb) と会い、1925年春にはドップがイタリアのスラッファを訪れたと推測される。1925年末に出版されたドップの著書に、1925年12月に出版されたスラッファの論文の近刊情報がある。これはドップがイタリアを訪問し、1925年論文の草稿を見たことを示唆する。ガレッニャーニの証言によれば(スラッファからの話として)、スラッファが1926年論文で不完全競争の議論を含め

14) スラッファはペルージア大学でマーシャル『原理』を教科書に使った (Naldi 2005, p.384)。学生に対して、経済学の試験準備にマーシャルの『原理』を用いるよう指導していた (Naldi 1998b, p.502)。イタリア語論文の Naldi (1998a) はスラッファの講義内容を詳細に調査しているが、それは藤井 (2000, 75-78 頁) で詳しく紹介されている。

15) Naldi (2005, p.384) によるとスラッファは8月から11月、ロンドンに滞在した。

たのはドップからの直接の示唆によって決意したものである。(Naldi 1998b, pp.503-504)

1925 年論文

ここでスラッフアの代表的な研究業績である 1925 年論文「生産量と生産費との関係について」(Sraffa 1925) に関して簡単に見ておこう。

Naldi (2000) によると、1925 年論文と 1926 年論文、すなわちマーシャル理論に関する論文はグラムシとの討論が関係している。グラムシはスラッフアの研究の公表に関心を持っており、2 つの論文の少なくともいくつかの部分に関してスラッフアと議論していた。グラムシは企業活動に関心を持っていた。経済学への客観的アプローチと主観的アプローチの相違をスラッフアに定式化するようにさせた。1925 年のマーシャル理論批判は、少なくとも 1923 年春にスタートした研究計画の重要な要素として現れた。古典派経済学への強い関心。1926 年 12 月 11 日付のグラムシからスラッフアへの手紙で、経済学と政府財政について勉強したいので基本的な文献を送って欲しいとあり、スラッフアはマーシャルの『経済学原理』とエイナウディの『財政学講義』を送ったという。(Naldi 2000, pp.89-92)

さらに Naldi (1998b, p.502) によると、1925 年論文の印刷に出す前の最終ドラフト (Sraffa Papers, D3/5/1-2) にはマッティオリ (Raffaele Mattioli) による多くの訂正があり、いくつかの文章がある。これに関してナルディは、1925 年論文はスラッフアとマッティオリの共同論文というようなものではなく、スラッフアの見解を 2 人の友人が詳細に検討し、すでに書かれた文章表現などの改善でマッティオリの手助けがあった、そういうものと考えると述べている¹⁶⁾。

16) マッティオリはスラッフアより 3 歳上で、カピアーティのもとで学び、ジェノヴァ大学を卒業している (藤井 1987, 142-143 頁参照)。スラッフアは『商品による商品の生産』(1960 年) の英文テキストは自身で作成しているが、イタリア語版のテキストを作成する際は、イタリア語がスラッフアの母語であるにもかかわらず、マッティオリと共同で作業をしていたのである。松本 (2010, 89 頁) およびここにあげた諸文献参照。英語版に関しては、スラッフアは校正段階で P. ガレツニャーニや A. セン (Amartya Sen) に読ませている。

キャリアリ大学教授職

スラッファがキャリアリ大学に職を得たときの経過を見ることにしよう。

スラッファはキャリアリ大学の経済学教授職に応募し、1926年3月その職に就いた。その選考で1925年論文が評価されるのだが、その選考過程について、ポチエは残されている資料に基づいて報告している。藤井(1987、144-145頁)にも選考状況が同じ資料に基づいて紹介されている。以下はPotier(1991, pp.17-18, 82)の要旨である。

キャリアリ大学では1925年末に3つの教授職採用のための選考委員会が組織された。その長はAugusto Grazianiで歴史主義と限界主義を調和させようという折衷主義的な経済学者であった。他のメンバーは、Constantino Bresciani-Turroni、Attilio Cabiani、Lorenzo Mossa、Umberto Ricciであった。Mossaは委員会のセクレタリーであったが、委員会のなかでただ一人法学者の商法教授で、かつてアンジェロ・スラッファの学生であった。Ricciは委員会の記録係であった。11名の応募者がいたが、6名だけが審査の対象になり、3名が選考された。選考された3名はいずれも5名の審査委員の票を得た。

ポチエは選考委員会の報告書のうちスラッファに関する部分を引用している。その内容はつぎのとおりである。

この候補者の学問上の成果はそれほど多くはない。それは、「生産費と生産量の関係」に関する覚え書、「戦中・戦後のイタリアの貨幣膨張」に関する覚え書、イタリアの銀行危機についての『エコノミック・ジャーナル』に掲載された論文(割引銀行Banca di Scontoの没落をあつかっている)、パンタレオーニの死亡記事、そして『マンチェスター・ガーディアン』増刊号の「イタリアの銀行の状況」という小論である。委員会はこれらのうち特に最初の著作を評価した。著者は純粋経済学の最も難解なテーマの一つに対決している。にもかかわらず委員会は著者が到達した結論に批判的であった。委員会はまた、その著者が簡潔、簡明に表わそうということに明確に腐心していたことを書きとどめておく。そのことは著者をして時々、構成を複雑にさせ、難解さと紙一重という節制に至らしめた。しかし、著者がすでに自身を

厳密な思索家で分別のある批判的精神の持ち主であると主張していること、そして主題に関する文献に関して広範な知識を持っていることは否定されることはない。

銀行危機に関する論文はまた、『マンチェスター・ガーディアン』の非常に簡潔だが辛辣な小論と同様、経済の事実に関する著者の観察と確かな解釈の熟達を確信させるものである。委員会は以上のように、この候補者が大学で教鞭をとるのに十分成長していることを一致して認めるものである。(Potier 1991, pp.17-18)

このような経過でスラッフアは 1926 年 3 月、キャリアリ大学に職を得たが、1 年も経たないうちにジェノヴァ大学への移籍を考えていたようである。

Potier (1991, p.20) は、スラッフアが 1927 年 1 月初めにジェノヴァ大学の教授職を得ようとしていたのは、そこが家族がいるミラノにより近いからということであったと述べている。しかし、それはうまく行かなかったとも述べている。そのすぐ後にケインズから、ケインブリジ大学の講師職の可能性が伝えられた (1927 年 1 月 25 日付の手紙)。

ナルディは、スラッフアは 1927 年にジェノヴァの Scuola Superiore の経済学教授職の審査に合格したが、キャリアリ大学に留まったという¹⁷⁾。その理由は、ケインズから話があったケインブリジで 1~2 年過ごすのに必要な休職扱いが得やすかったからからのようであった。スラッフアは 1927 年 6 月にはケインブリジの講師職を受け入れ、7 月半ばには英国に旅立った。しかし、Sraffa Papers B7/4 の資料から 1927 年 10 月にはスラッフアはキャリアリ大学で講義をすることになっていて、キャリアリ大学へはこの月の 1 か月間病気で休むと連絡していたことがわかる。その後彼は 1 年間の休暇願を英国から出した。それはおそらく 1928 年 1 月のことで、その時点ではかれはケインブリ

17) ナルディは 1927 年のジェノヴァ大学の教授職の審査と 1923 年 10 月にフォクスウェルが書いた推薦状とが関係するような書き方をしているが、疑問である。というのは、前述のように 1923 年 9 月 29 日付でスラッフアはフォクスウェルに対し、すでにお願した推薦状を早く送って欲しい旨の書状を速達便で送っているからである。ケインブリジ大学の経済学講師職就任の経緯に関しては松本 (1992b) が詳しい。

ジでの講義開始を1年間延期する許可をすでに得ていたのであった。(Naldi 1998, pp.501-502)

Naldi (1998b) の付録 C に英語訳で紹介されている、ミラノの諸大学のファシスト分子が発行していた新聞「*Libro e Moschetto* (本と拳銃)」の1927年3月18日号(第1年第4号)の「ジェノヴァの同志：注意せよ」と題された記事によると、ジェノヴァの School for Higher Business Studies に経済学教授職の設置があり、カビアーティ教授は当然、審査員のなかにいたとあり、「この審査はピエロ・スラッファのために特別に設けられた」とある。この記事には、スラッファはロンドンにいるボルシェヴィキで、ロシアのスパイと長く接触がある、とも記されている。

スラッファは1927年7月7日にイタリアを立ち、7月11日に英国に着いた。(Naldi 1998b, p.525; 2000, p.93)

通貨・金融問題に関する3つの論文

ここから、イタリアの通貨問題、銀行問題に関するスラッファの3つの論文を順に取りあげることにしてしよう。

(1) 「戦中・戦後のイタリアの貨幣膨張」 Sraffa (1920)

スラッファの卒業論文「戦中・戦後のイタリアの貨幣膨張 *L'inflazione monetaria in Italia durante e dopo la guerra*」は次のような5章構成である¹⁸⁾。

1. 貨幣流通量の拡大 *L'espansione della circolazione monetaria*
2. 銀行による貨幣膨張 *L'inflazione bancaria*
3. 貨幣膨張の物価への影響 *Effetti dell'inflazione sui prezzi*
4. 健全な貨幣を回復するために過去に取られた方法 *Metodi impiegati nel passato per ritornare alla moneta buona*
5. 現在の状況においてイタリアの貨幣流通を回復するための最も適切な方法 *I rimedi più idonei per risanare la circolazione italiana nella*

18) 藤井(2000)は、スラッファの卒業論文のタイプ打ち版(藤井はトリノ版と呼ぶ)、印刷版(藤井はミラノ版と呼ぶ)、英訳版の異同等の比較をしている。トリノ版には手書きの修正があり、さらに推敲が加えられミラノ版になっているようである。

situazione attuale

スラッフアは論文を次のように書きだしている。「紙幣流通の復帰に着手するための必要十分条件は、政府が予算の赤字を避けるような立ち位置にあることで、それは銀行券あるいは政府紙幣の新たな発行を直接にも間接にも必要としない節約か収入によってである」。各章の内容は、ごく簡単に要約すれば次のようである (Potier 1991, pp.7-8 参照)。

第 1 章：1914 年 7 月から 1920 年 6 月までの貨幣流通量の膨張について、統計数字を Stringher 『戦中・戦後の貨幣流通量および貨幣市場の状態について (*Su le condizioni della circolazione e del mercato monetario durante e dopo la Guerra*)』(1920 年) によって示して、第 1 章で出てくる統計数字はすべて同書によっていることを、スラッフアは注記している。

第 2 章：この章では、銀行の活動の広がりを制限するよう設定されたメカニズムが、なぜこの期間に作用しなかったか、それを理解することに関心が寄せられている。

第 3 章：タイトル通り、貨幣膨張の物価への影響が論じられている。

第 4 章：イタリアや諸外国の実際に関するここまでの研究をベースにして、健全な貨幣に復帰するために過去に用いられた方法をスラッフアは検討している。過剰な貨幣流通を治療するために提案された解決方法は次の 2 つに帰せられるという。

1. 元の購買力に完全に戻るまで貨幣を流通から引き上げる。
2. 新規通貨の発行を単純に断念し、現実已到達している購買力水準を受け入れること。

第 5 章：この 2 つのタイプの解決方法が検討される。戦前の金本位制に戻るのが良いという議論は経済というよりも情動的な性格を持っている。そのような政策は通貨膨張による不正のいくつかを正すだけで、生産や為替に対して悲惨な結果をもたらすことになる。よってスラッフアは第 2 のタイプの解決が好ましいと考える。論文の最後は次のように結ばれている。「全体として、外国為替の安定と物価の安定とが両立しない (金の価値の上昇という仮定のもとで) ということ認識するならば、前者より後者の方が好ましいと私には思わ

れる。金の価値の運命が世界の大国によって明確に決定されるまでは、法定通貨の流通を保持することは、誤用という深刻な危険があるにもかかわらずよりよいことである」。

ロンカッリアは「スラッフアの論文の最も重要なオリジナルな貢献は国内と国外での貨幣価値の安定性の区別にある。いいかえれば、国内物価の平均水準の安定性と為替レートの安定性との区別である」と評価している（Roncaglia 2000, p.6 ; 2009, p.2）。

入学から卒業までスラッフアの大学在籍期間は兵役についていた期間を含めて4年間であったが、学業に専念できた期間は2年もあったであろうか。大学在籍中にかれがどのような講義を受けたのか、詳細は不明であるが、論文作成にあたっては、かなりの数の文献を読んでいた。そのことは卒業論文で参照されている文献・資料からわかる。以下、参考文献を論文に記載されている順に列挙する。スラッフアは一部を除いて著者名を姓だけしか記載していない。なお、英文資料の場合、英訳版の表記を用いる。

Bagehot, *Lombard Street*, London, Murray, 1919.

Stringher, *Su le condizioni della circolazione e del mercato monetario durante e dopo la guerra*, Roma, Casa Editrice Italiana, 1920, 及びフランス語版（1920年9月）。

Loria, *Le peripezie monetaria della guerra*, Milano, Treves, 1920.

Fisher, *Stabilizing the Dollar*, New York, Macmillan, 1920.

Dunbar, *The Theory and History of Banking*, New York, Putman, third edition, 1917.

Withers, *The Meaning of Money*, London, Smith, Elder & Co., second edition, 1909.

Canovai, *Le Banche di Emissione in Italia*, Roma, Casa Editrice Italiana, 1912.

International Secretariat of the League of Nations: *Currencies after the War*, London, Harrinson, 1920.

Currency Statistics, Paper no.III, Prepared for The International Financial

- Conference, London, Harrinson, 1920.
- McKenna, *Report of March 1920 to the London Joint City Midland Bank shareholders.*
- Nicholson, *War Finance*, London, King, 2nd edition, 1918.
- Bulletin of the U.S. Bureau of Labor Statistics*, no.245, Washington, 1919.
- Biblioteca dell'Economista*, serie II, volume 6, Torino, 1857.
- Cannan, *The Paper Pound of 1797-1821*; a reprint of the *Bullion Report*, London, King, 1919. (松本註：キャナンによる同書への序文が参照されている。)
- Subercaseax, *Le Papier Monnaie*, Paris, Giard et Brière, 1920.
- Raffalovich, 'Les Méthodes employée par les Etats au 19 siècle pour revenir à la bonne monnaie' (in *Documens, Mèmoires et Notes*, Monographies du Congrès International des Valeurs mobilières, Paris, Dupont, 1900, 11fasc.)
- Relazione agli Azionisti della Banca d'Italia per il 1919* (英訳：1919 Report to the shareholders of the Bank of Italy.)
- Cabiati, *Problemi commerciali e finanziari dell'Italia*, Milano, Treves, 1920.
- A.Alison, *History of Europe* (quoted by Withers, op.cit.,p.19)
- Thomas Tooke の証言：Evidence before the Parliamentary Committee of Inquiry on renewing the privilege of the Bank of England, meeting of 10 July 1832, nos.3882-3883.
- Nicholson, *Inflation*, London, King, 1919
- Cassel, *Memorandum sur le Problems Monetaires du Monde*, London, Harrison, 1920.
- Vissering, *International Economic and Financial Problems*, London, Macmillan, 1920.
- The provisional report of the Committee on circulation and foreign exchanges after the war* (Lord Cunliffe's Committee)
- 以上の参考文献のうち、出版年が卒業論文が作成されたのと同じ 1920 年の

ものは9点ある。かなり集中的に準備作業をしたものと推察できる。

(2) 「イタリアの銀行危機」 Sraffa (1922a)

スラッファがこの論文で取り上げているのは、イタリア割引銀行 (Banca Italiana di Sconto、英語で Italian Discount Bank) である。スラッファは論文を「イタリア割引銀行の生と死と奇跡的な復活は、やや詳細な考察に値する。というのは、それに関する論述においてイタリアの金融システムのいくつかの側面に光を投げかけ、その傾向について過激な結論を提示することになるからである」という文章で書きだしている。

この論文はイタリア割引銀行の1914年末の誕生から1921年12月の破綻までの物語を論じている¹⁹⁾。そして、イタリアの金融システムの現状を、そのシステムの弱さ、癒着の現実、ごまかしという手段などから、完全な違法行為でないとしても法律や規制に照らし合わせて、解明している (Roncaglia 2009, pp.3-4)。

スラッファが特に取り上げているのは、イタリア割引銀行とジェノヴァのアンサルド社 (Ansaldo Company) の癒着である。

アンサルド社は、戦争 (第一次大戦) 前は資本金3千リラで、冶金事業のほぼ専業であった。戦時中に、最大の兵器製造業に事業拡大した。1918年のはじめには資本金が1億リラで、エンジニアリング、船舶や航空機の製造、鋳業、海運業など会社合併で拡大し、全部合わせて7万人を超える従業員であった。

19) 藤岡 (2009) の注 54 にイタリア割引銀行に関して次のように記されている。「イタリア割引銀行は、1914年12月30日、イタリア県信用協会 (Società italiana di credito provinciale、前 Banca di Busto Arsizio) と清算中の銀行協会 (Società bancaria) との合併によってローマを本拠地に設立された。第1次大戦により、軍需大産業数社の融資・販売促進の役割を要請された。終戦直後の2年間で増大した膨大な数の帰還兵により、イタリア銀行 (Banca d'Italia) への負債は1921年12月に13億リラ、同年12月には17億リラに上昇した。1921年12月29日、割引銀行への支払い猶予 (モラトリアム) を発令したが、その後、解散する。なお、割引銀行の倒産の引き金となったのは、戦争中に急成長した機械・兵器産業企業アンサルド社 (Ansaldo) の倒産であった。同社はムッソリーニの運営する新聞『イタリアの人民』のパトロンでもあった」。藤岡 (2009) はグラムシの覚え書きの邦訳であるが、この注記自体は藤岡氏が邦訳の底本としたピッショネ (Francesco M. Biscione) による校訂版の注記を藤岡氏が訳したものである。

この巨大な拡大に融資した銀行は、アンサルド・グループに、通常のリスクをはるかに超えてその資源のすべてをつぎ込んだ。1918 年のはじめには、もうこれ以上は不可というところまでいった。その解決策はアンサルド社への新たな融資先を探すことであり、もっとも簡単な解決策は他の大銀行を手に入れることであった。それはドイツ資本のもとにあったイタリア商業銀行の資本をイタリア化することであった。これに対し Marsaglia グループから直ちに反対が出た。政府が介入し、1918 年 6 月、2 つのグループにシンジケートが形成された。1918 年夏にはアンサルド社の資本金は 1 億リラから 5 億リラになり、株式発行は政府とすべての銀行の支援でうまく行った。アンサルド・グループは割引銀行からの融資で戦争を足場にした事業を継続していたが、平時の生産への転換の準備をしていなかったのである。

1921 年 12 月 29 日、割引銀行は扉を閉じた。発券銀行 3 行と、主要 3 銀行がコンソーシアムを構成して、6 億リラのリスクを引き受け、割引銀行のアンサルド社への債権の解除ができるようにした。

この論文と『マンチャスター・ガーディアン・コマーシャル』特集号に掲載された論文とで、スラッフアが銀行業務の制度的および技術的諸側面の全般的な把握を見せているが、その一部はおそらくスラッフアが大学卒業後に Banca di Legnano e Busto Arsizio という地方銀行で得た実務経験に負っているとロンカリアは述べている (Roncaglia 2009, p.3)。

(3) 「今日のイタリアの銀行業」²⁰⁾ Sraffa (1922b)

スラッフアの論文が掲載された『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』特集号「ヨーロッパにおける再興」第 11 号ではテーマが 3 つあり、ひとつは「為替の安定 The Stabilization of the Exchanges」でケインズを含む 8 名が執筆し、もうひとつが「ヨーロッパの銀行業務 European Banking」でスラッフアを含め 15 名の執筆者である。3 つめはイングランド銀行の歴史

20) この題名は掲載紙に ITALIAN BANKING TO-DAY と印刷されている。スラッフアは today ではなく to-day とハイフンを入れる綴りで書いていることが多い。ロンカリアもポチエも「today」とハイフンを落として記載している。

に関するもので、この号では建築の歴史ということでユニバーシティ・コレッジ・ロンドンの建築学教授のリチャードソン (Albert E. Richardson) が寄稿している。

スラッファはこの論文でもイタリア割引銀行の破綻に関して論じているが、それが中心ではなく、発券銀行3行 (Banca d'Italia, Banca di Napoli, Banca di Sicilia) と破綻した割引銀行のほか3つの大手銀行 (Banca Commerciale Italiana, Credito Italiano, Banco di Roma) を取り上げている。藤井 (1987, 141 頁) は「この論文はイタリア割引銀行倒産後のイタリアの金融制度が主になっており、イタリアの銀行、特にイタリア商業銀行とイタリア信用銀行が経営危機を乗り切るために、政府および発券銀行が設立した『産業株式融資組合』との間で信用供与のたらい回しをして、その規模の拡大が銀行券の多発によって賄われる危険性を論じ、結局そのツケが国民に回ってくることを述べている」と整理している。

むすび

スラッファが1920年から1924年ころまでは、もっぱら金融ないし通貨問題に関心を持っていたことは間違いない。その切っ掛けが何にであったか、確実なことは不明である。卒業論文のテーマ選択がカビアーティの示唆によるものだったとすれば、それが切っ掛けだったのかもしれない。それとも、スラッファ自身、当時のイタリア経済における金融問題にまず関心が生まれたのだろうか。ただ、Naldi (1998, p.495) によると、スラッファは大学在学中に法律家としての訓練を終えていたという。あるいは、父親と同じ、弁護士あるいは法律家の道を考えていたのだろうか。そうであるなら、銀行で実務の仕事にあっていたことも、法律家の業務に役立つということで理解することができる。

その後、スラッファがLSEに研究生として留学したことは、どう理解すればよいか。本人の意思がまずあったのか、それとも父親あるいは両親からの勧めだったのか。LSE留学時にスラッファはケインズの知己を得たが、その時点ではフォクスウェルとの関係も強かったと思われる。それは、スラッファの父親からの要請であったが、フォクスウェルを特別講義のためにミラノに招聘

し、その後には家族ぐるみでの交流があったことやジェノヴァ大学就職のための推薦状を書いてもらっていることなどからわかる²¹⁾。

ただ、すでに述べたように、1921 年 12 月にケインズがスラッフアと会った際に、イタリアの金融、貨幣問題に関する彼の知識、分析力を評価して『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』特集号のために論文記事の寄稿を求めたと考えられる。もし、それがなかったら 1922 年の 2 つの論文は無かったかもしれない。

ロンドン留学から 1922 年 4 月末に帰国した後、スラッフアはその年の終わりまでミラノの労働局で働いていた。ケインズから依頼があったイタリアの銀行に関する論文ないし論説は結果的には 2 つになったが、ロンドン滞在中に原稿を書き上げたと考えることは可能である。ケインズが編集責任者として『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』の特集号「ヨーロッパにおける再興」の第 1 号が刊行されたのは 1922 年 4 月 20 日であった。スラッフアが準備した論文記事は 1922 年 12 月 7 日付の第 11 号に掲載された。このあとムツソリーニからの電報、イギリス入国拒否など、困難な事態はあったが、1923 年にはいつてスラッフアは改めて経済学の勉強をはじめた。1923 年 4 月までにはスラッフアはマーシャルの『経済学原理』を精読し始めていたと、Naldi (1998) は報告している。その後、11 月にペルーシア大学で職を得ることになる。これ以降、マーシャル理論批判の 2 つの論文のほか、*Gionale degli Economisti e Rivista di Statistica* 誌の 1925 年 7 月、1926 年 4 月 (2 点)、1927 年 10 月の各号に書評ないし文献紹介を計 4 点執筆している²²⁾。

このように見てくると、トリノ大学および LSE の学生時代において、スラッフアは経済学者としてアカデミズムでキャリアを積むということは考えていな

21) アンジェロ・スラッフアからの依頼で、1923 年 4 月から 5 月にかけてフォクスウェルはミラノ・ボッコニー商科大学で講義を行った。講義依頼に関連してピエロ・スラッフアがフォクスウェルに送った 1922 年 7 月 28 日付の書簡以降数通をフォクスウェルは保管していて、現在、関西学院大学図書館に所蔵されている「フォクスウェル文書」のなかにある。それらから家族ぐるみで交流があったことがわかる。

22) それらは藤井 (1987) の参考文献番号 63、65、66、68 である。そこには対象の書名、著者名も記載されている。Sraffa (1986) 末尾の著作目録にも記載されている。

かったように思われる。彼は裕福な家庭の一人っ子で、お金の心配なく学業に専念でき、将来の職業選択はさまざまな可能性があった。ファシスト政権からの圧力を受けて以降、ペルージア大学に職を得るまで表立った活動はしていない。スラッフアが本格的に経済理論を身につけることを始めたのがこの時期であったと考えれば、まさにこの雌伏の時期が「経済学者」スラッフアの基礎を作ったのかもしれない。

参考文献

- Dostaler, Gilles (2007) *Keynes and his Battles*, Edward Elgar.
- Harrod, Roy (1951) *The Life of John Maynard Keynes*, Norton paperback, 1982 (塩野谷九十九訳『ケインズ伝』改訳版、上・下、東洋経済新報社、1967年).
- Keynes, J.M. (1977) *Collected Economic Writings of John Maynard Keynes*, Vol.XVII, The Macmillan Press (春井久志訳『ケインズ全集』第17巻、東洋経済新報社、2014年).
- Naldi, Nerio (1998a) “Piero Sraffa a Perugia: novembre 1923 – febbraio 1926” *Il pensiero economico italiano*, VI(1).
- (1998b) “Some Notes on Piero Sraffa’s Biography, 1917-27”, *Review of Political Economy*, Vol.10, No.4.
- (2000) “The friendship between Piero Sraffa and Antonio Gramsci in the years 1919-1927”, *European Journal of the History of Economic Thought*, Vol.7, No.1, Spring.
- (2005) “Piero Sraffa: emigration and scientific activity (1921-45)”, *European Journal of the History of Economic Thought*, Vol.12, No.3, September.
- (2010) “Piero Sraffa in his family 1898-1916” in *Economic Theory and Economic Thought, Essays in honour of Ian Steedman*, ed. by John Vint et al., Routledge.
- (2011) “Three notes on Piero Sraffa’s early economic writings: 1920-26”, in *Sraffa and Modern Economics*, Vol. II, ed. by R.Ciccone et al., Routledge.
- Potier, Jean-Pierre (1991) *Piero Sraffa – unorthodox economist (1898-1983)*, *A biographical essay*, Rouledge (フランス語原著: *Un Economiste non conformiste – Piero Sraffa (1898-1983)*, Presses Universitaires de Lyon, 1987).

- Roncaglia, A. (2000) *Piero Sraffa, His life, thought and cultural heritage*, Routledge.
- (2009) *Piero Sraffa*, Palgrave Macmillan.
- Sraffa, Piero (1920) *L'inflazione monetaria in Italia durante e dopo guerra*, Premiata Scuola Tip. Salesiana. 英訳 “Monetary Inflation in Italy during and after war” translated by Wendy J. Harcourt and Claudio Sardoni, *Cambridge Journal of Economics*, Vol.17 (1993), pp.7-26.
- (1922a) “The Bank Crisis in Italy” *Economic Journal*, Vol.XXXII, June.
- (1922b) “Italian Banking To-day” *Manchester Guardian Commercial: Reconstruction in Europe*, No.11, 7 December.
- (1925) “Sulle relazioni fra costo e quantità prodotta” *Annali di Economia*, Vol.II.
- (1926) “The Laws of Returns under Competitive Conditions” *Economic Journal*, Vol.XXXVI, December.
- (1960) *Production of Commodities by Means of Commodities, Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press.
- (1986) *Saggi*, Il Mulino.
- 藤井盛夫 (1987) 「ケンブリッジ以前のスラッファ」『経済集志』第 57 巻第 2 号、7 月。
- (2000) 「スラッファの卒業論文について」『経済集志』第 70 巻第 1 号、4 月。
- 藤岡寛己 (訳) (2009) 「アントニオ＝グラムシ『南部問題、および共産主義者・社会主義者・民主主義者の南部問題をめぐる姿勢にかんする覚え書き』」『福岡国際大学紀要』No.22.
- 松本有一 (1989) 『スラッファ体系研究序説』ミネルヴァ書房。
- (1992a) 「ケイムブリジでのスラッファ—— J-P. Potier『ピエロ・スラッファ——異端の経済学者 (1898 - 1983)』を読んで——」『経済学論究』第 46 巻第 1 号、4 月。
- (1992b) 「スラッファの人事問題におけるケインズの力」『経済学論究』第 46 巻第 2 号、7 月。
- (1998) 「スラッファ—古典派経済学の復位」橋本昭一・上宮正一郎 [編] 『近代経済学の群像』第 9 章、有斐閣。
- (2010) 『『商品による商品の生産』へのスラッファの歩み』『経済学論究』第 64 巻第 1 号、6 月。